

平成17年度独立行政法人福祉医療機構「障害者スポーツ支援基金」助成事業

「医療的ケアを要する重度運動障害児の臨海水泳宿泊合宿の実施事業」  
に関する報告書

平成18年3月30日

医療的ケア児・者水泳活動親子グループ「らっこの会」

## 目次

- I はじめに
- II 概要
- III 参加児の医療的ケアの内容と身体状況および水泳活動、臨海水泳合宿での注意点
- IV 事前準備および水泳活動以外の周辺内容の説明
  - 1 臨海水泳活動内容の選定
  - 2 臨海水泳活動場所の選定理由
  - 3 行程・日程の選定
  - 4 宿泊地・宿の選定
  - 5 交通手段としてリフト付きユニバーサルデザイン大型観光バスを選定した理由
  - 6 緊急時対応
    - (1) 緊急時体制
    - (2) 事前準備、緊急時対応マニュアル
    - (3) 緊急連絡先の消防本部と緊急時対応病院の確認・リスト化
  - 7 宿泊施設にて
  - 8 事前の説明会・講習会の開催
- V 水泳活動 1 — 弓ヶ浜・浜辺波うち際活動について —  
補足：事前のプールの水泳活動にて臨海水泳模擬練習 A「波を楽しむ！」
- VI 水泳活動 2 — ドルフィンコンタクト —
  - 1 下田海中水族館・館外および館内での支援
  - 2 水泳活動 — 下田海中水族館ドルフィンビーチでのドルフィンコンタクトの理解と準備 —
    - (1) 受け入れ先のドルフィンビーチ・スタッフとの連携  
補足：事前のプールの水泳活動にて臨海水泳模擬練習 B「ドルフィン・タッチ！」
    - (2) ドルフィンビーチ・ドルフィンコンタクトの営業状況の理解
    - (3) 受け入れそのものに関してその手順
    - (4) 実際的な入水プログラム・調整
    - (5) 医療支援体制について
    - (6) 入水・コンタクト支援体制について
    - (7) 医療的ケアへの対応や補助
      - ① 気管切開への対応
      - ② 酸素療法の水上導入
      - ③ 人工呼吸器離脱時アンビューバッグでの呼吸補助
      - ④ 口鼻腔吸引・気管内吸引
    - (8) 体温調整のための専用水着、活動後の温浴、更衣コーナーや日陰コーナーについて
    - (9) 移動方法について
  - 3 ドルフィンタッチの実際 — 進行の状況・実績（添付DVD参照） —
- VII 他の活動について

- 1 懇親会
  - 2 花火、潮騒を聞きながらの星空観察
- VI 傷害保険など
- VII 今回の臨海宿泊水泳合宿体験と今後の課題
- 1 有効であったこと
  - 2 改善を要したい内容
- VIII まとめ
- IX 今後について
- X 参考文献・資料
- ( 謝辞 )

※ 尚、文中の写真に関しては本人または保護者に修正なしでの掲載の許可を得ている。

今回の事業の助成の表示

この報告書の製作及び照会先

## I はじめに

医療的ケアを必要とする重度運動障がい児と親の水泳活動の愛好会「らっこの会」では、この数年来「100%安全で楽しい」水泳活動を年5回程度、身障者用温水プールを専用使用して実践してきた。この7年間で延べ約300人が水泳参加してきた。今回助成金をいただき、現在の会員で参加希望した児を主人公とする臨海水泳宿泊合宿を開催した。経管栄養や吸引、酸素療法、気管切開、人工呼吸器利用などの医療的ケアを必要とする重度運動障がい児9名と家族の全員が楽しめた。この合宿の解散時に「200%大成功の合宿でした。拍手!」と発言した保護者のこの言葉が、今回の事業内容の成果を示していると思う。しかし、そのための事前調査や実施体制作りなど入念な準備や配慮、保護者と支援スタッフの協力し合える活動があったからこそ成功したのであり、また、今後に向けて反省すべき内容も明確になった。今回の活動を整理し報告することで、今後、医療的ケアを必要とする重度運動障がい児の臨海水泳活動への指針となり、同様の活動をされる方々に参考にしていただきたいと考える。

## II 概要

参加児は、家庭での医療的ケアが確実になされていて健康であり、水泳活動は主治医の許可を意見書として得ている。今回の宿泊行事に関しても主治医の健康診断と諸注意や指示を受けた。日常の水泳活動と同様で、保護者が主体的に責任を持ち入水活動と医療的ケアを行うことを基本とする。その際に、必要な補助的援助内容を看護師チーム、または、教員・セラピストチームが支援する。これらを活動の基本とした。

今回の企画の概要説明と参加希望者への医療的ケア関連も含む事項のアンケート調査を行ない具体的な準備を進めた（参考資料1・2）。移動に使用したユニバーサルデザインのリフト付き大型観光バス、移動経路、休憩場所、宿泊施設、活動場所を複数回実地調査し、ビデオ上映会を開催した。

- ・ 7月下旬、東京西部の武蔵村山市内にある都立肢体不自由養護学校を集合場所とし、リフト付き大型観光バス利用を利用して片道走行6時間をかけての遠距離である南伊豆・弓ヶ浜海岸隣接のバリアフリー旅館を宿とする一泊二日の宿泊水泳合宿を実施した。1日目は弓ヶ浜でのビーチ活動、2日目はそこから20分程移動した海中水族館の入り江にて、「静水ビーチでのドルフィンタッチ」を主とする臨海活動を行った。

- ・ 開催日時：平成17年7月27日～28日一泊二日。（関東に接近しどうにか伊豆半島はそれて東北に移動した大型台風、その台風一過の朝の出発であった。）

- ・ 宿泊場所：宿泊は静岡県賀茂郡南伊豆町弓ヶ浜温泉「季一遊」。シーサイドのバリアフリー宿泊施設であり、全行程と時間的な有効性で選定した。また、比較的大型のエレベーターがあり大型使用の車椅子も使用できるバリアフリーの状況であった。

- ・ 参加者：「らっこの会の会員」で参加を希望した9名（うち人工呼吸器24時間使用4名、人工呼吸器部分的使用1名、気管切開施行7名、チューブ栄養9名）と家族14名、看護師4名、活動支援者26名（内訳：肢体不自由養護学校教諭13名、医療リハビリスタッフの理学療法士・作業療法士12名、個人支援者1名）合計53名だった。



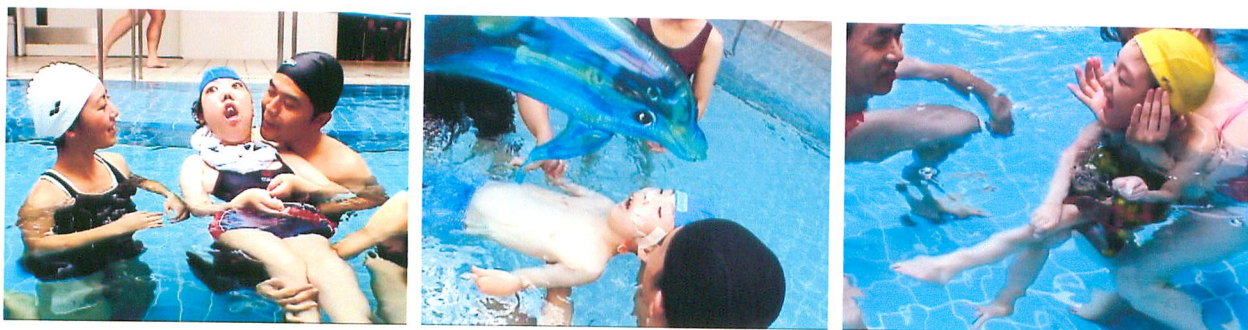
- ・ 活動場所・臨海水泳教室：①弓ヶ浜海水浴場にて、台風一過で波も高かったために入水せずの砂浜活動を実施した。② 下田海中水族館内ドルフィンビーチにて、イルカと触れあい交流を主とした入り江の静水での水泳活動の実施とした。
- ・ 上記の臨海水泳教室の事前準備として、「らっこの会」とその支援者である「らっこ支援者の会」とで支援体制を検討し、また、事前学習会を実施した。研修内容は、(1) 重度運動障害および医療的ケアに関する準備 (2) 砂浜での水泳支援方法の検討 (3) 入り江での水泳支援方法の検討 (4) イルカの習性と触れあいビーチでの交流方法の学習 であった。尚、身障者用室内プールを団体借用し定例開催している親子水泳教室にて、事前の擬似的な臨海水泳教習を実施し、水泳支援技術検討とその練習を行った。

### Ⅲ 参加児の医療的ケアの内容と身体状況および水泳活動、臨海水泳合宿での注意点

参加児の9名は、家庭での医療的ケアが確実になされていて健康であり、水泳活動は主治医の許可を得ていた。今回の宿泊行事に関しても主治医より健康診断と諸注意や指示を得た。年齢は5歳から19歳で、内訳は幼児1名、小学生6名、中学生1名、卒後通所施設利用者1名だった。医療的ケアに関しては、9名中の5名が気管切開をし人工呼吸器を使用していた。また、そのうちの4名は24時間の人工呼吸器使用児で、水泳活動中はアンビューバッグ（緊急時呼吸補助バッグ）での呼吸補助に切り替えて水泳活動を行っている。残る1名は部分的に呼吸器から離脱できその際は酸素療法が必要なので、支援者が酸素ボンベを水上導入し酸素療法を継続しつつ水泳活動を行っている。9名のうち他の2名も気管切開を行っていて、9名中7名が気管切開施行者で、喉頭気管分離術が4名、単純気管切開は3名だった。栄養管理では全員が経管栄養利用者と、2名が経口摂取を兼ねていた。全員が必要時に分泌物などの吸引が必要となるが、口鼻腔吸引のみは2名、気管内吸引併用は7名であった。尚、水泳活動中に吸引が必要となるものは7名だった。医療的ケアは保護者が行い、状況で看護スタッフが補助した。







〈参加した9名の水泳活動場面である。呼吸補助、酸素療法、気管切開部の保護などの対応をしている〉

医療スタッフは看護師が4名だった。医療的な対応は保護者が行ったが、看護師1名が参加児2－3名を担当する体制をとり、医療的ケアの補助や相談を行った。

運動機能については、全員が頸部や体幹のコントロールが難しく、体位変換や座位などの姿勢保持は独力で行えないため、適切なハンドリング（人の手による介助）や保持用具が必要である。同時に、介助や姿勢管理において骨折への配慮が必要であり、特に注意を要する児が2名いた。また、体温調整が困難な児もいて暑い夏の季節であることについて配慮を要し、一方水温が低い海水活動ということから全員が体温管理を慎重に行う必要性があった。

適時・即時的な口鼻腔や気管内吸引への対応以外での水泳活動中の注意点は、呼吸機能関係に対する医療的ケアの水上導入（呼吸補助や酸素療法の継続）、気管切開部からの水の浸入や気管切開部・気管内損傷の予防、体温調整、骨折予防であった。これらの医療的、身体的対応が必要で、保護者と共に教員やリハビリスタッフが協力した。

以上、日常的な水泳活動で実践してきている内容であり、2001年度で別機関から研究助成を頂き概要をまとめた（文献1）が、今回は、医療的ケアを必要とする重度運動障がい児たちの遠方への集団での宿泊合宿であったこと、および臨海活動であることが特徴で、この2点を中心に以下整理して説明していく。

#### IV 事前準備および水泳活動以外の周辺内容の説明（参考資料3）

##### 1 臨海水泳活動内容の選定

これまで会員たちの臨海活動は皆無であった。理由は、日頃の水泳活動にも共通するが、医療的ケアを要する重度運動障がい児の臨海活動は家族だけでは実現できない実状があるからである。また、らっこの会としても水泳活動の基礎作りと、プール活動の運営が力量の限界であったと考える。昨年の活動中、複数の会員から臨海活動の要望が挙がってきたのを機会に、今年度は「らっこの会」として臨海活動を企画し、活動の拡がりに挑戦することを目的に、臨海活動での環境整備や支援技術についての実践検討も行った。また、多くの会員から「イルカと交流したい」という要望も挙がっていたので、アニマルセラピーの観点から企画に加えた。

##### 2 臨海水泳活動場所の選定理由

医療的ケアが必要な重度運動障がい児の水泳活動は、その環境が限定されがちである。保護

者および支援者が介助することとなるが、介助方法は介助者の腰から胸にかけての水深が適当で、また、気管切開している子ども達も多数いるので、穏やかな水面が望ましい事を考えると入り江が適当と考えられる。この条件下でアニマルセラピーとしてイルカとの交流が行える環境を調査した結果、関東甲信越エリアでは静岡県南伊豆町下田にある下田海中水族館のドルフィンビーチのみだった。

### 3 行程・日程の選定

（行程について）行程は二泊三日も考えられたが一泊二日の行程を選択した。理由はスタッフ・ボランティア確保と健康管理の2点からである。スタッフ・ボランティア確保に関しては、参加者の健康状態に精通した医師（小児科・小児神経科兼任）や看護師など、医療支援スタッフの確保が大きな課題となっていて、一泊二日なら確保が可能であるという状況だった。ならびに、今回の企画では20名を越える入水支援・進行スタッフが必要となり、同時に運動障害や水泳支援に精通し安全性に配慮できる専門性が要求される。これには小児疾患関連のリハビリ専門スタッフや肢体不自由教護学校教員が適切で、その人員確保も医師・看護師スタッフと同様な状況であった。また、経験ある医療スタッフからは「参加児の状態から考えると宿泊行事では一泊二日なら考えにくいが一泊三日になるとその環境変化から体調を崩す児もでてくる」という意見があった。これらの理由から今回の企画は一泊二日と決めた。

（日程について）活動場所となるドルフィンビーチは入り江を利用しているために水深の変化があり、潮位が高い時には40名程度が一時に入れるが、潮位が低いと10名程度となるという説明をビーチスタッフから受けた。私たちは、「40名程度の人員体制で参加する」「2日目の午前中にはドルフィンコンタクトを行い帰路につく」という制限があったため、気象庁の潮位予想を基とするドルフィンビーチスタッフの助言で、今回の7月下旬の日程が決まった。

### 4 宿泊地・宿の選定

上記の「一泊二日で下田海中水族館利用」の条件で、バリアフリー宿泊施設を調査した結果、宿泊地・宿として静岡県賀茂郡南伊豆町弓ヶ浜温泉「季一遊」を選定した。シーサイドのバリアフリー宿泊施設であり、全行程での時間的な有効性が予想できた。

（選定の経緯）宿泊地の調査は下田観光協会、南伊豆観光協会、近隣の肢体不自由養護学校や身体障害者通所センター、社会福祉協議会、および、今回の企画依頼先であるJTB（立川支店団体旅行担当）に対して行った。また、バリアフリーに関しては、参加児が使用している車椅子が標準型でなく、全員がリクライニング式である程度の長さがあるため、エレベーター空間も広さが必要であることも条件のひとつにした。人工呼吸器や吸引器などを搭載し、上半身を起こせないでリクライニングしていて、さらに、膝や股関節が曲がりにくく、150cmやそれ以上の長さのある車椅子を利用している児も複数参加していた。

東伊豆の熱川には「熱川ハイツ」がある。これは障がい者が多く利用している施設だが、熱川から目的地までは夏の観光シーズンということもあり、特に伊豆の東海岸の白浜海水浴場や下田市内を通過するのに極度の渋滞が予想され、行程が定まらなく不適切であろうと考えた。「熱川ハイツ」営業担当者も同様の意見だった。その他、お膝元の下田のホテルも検討した。観光協会の紹介で「下田東急」「下田ベイ黒潮」なども検討したが、シーズンで宿泊費が高額ということもあったが、エレベーターの広さや浴室へのアプローチも含めると利用可能な適当な



バリアフリー施設ではなかった。また、ここでは「下田ベイ黒潮」の社長も好意で近隣のホテルの情報提供をしてくださった。一方、弓ヶ浜海岸方面なら逆方向なので適当な時間で移動できるという情報で、弓ヶ浜の「国民休暇村南伊豆」を当たったがバリアフリーではなかった。それらの状況がある中、弓ヶ浜の「季一遊」ならエレベーターを利用して十分に館内移動ができ、人工呼吸器などの医療器材の管理も含めて、介護などで大変な入浴に関しても十分な広さのある家族風呂が複数あった。団体利用者の夕食処・懇親会会場、朝食の食事処のレストランもバリアフリー化が進んでいて、車椅子での利用が可能であった。また、部屋には若干の段差があったが入室ができ、居室の和風座敷にも車椅子乗り入れをシートを敷くことで許可していただくなど、配慮ある対応をしていただけの施設であることが解った。これらのことから、「夏のシーズンでも午前中30分程度で下田海中水族館への移動が可能であろう。そうであれば、全行程のスケジュールが円滑に展開でき、今回の企画が成り立つ」という結論に至った。「季一遊」サイドも私たちの利用を快諾してくださり、これらの理由から宿泊は「季一遊」に決定した。「季一遊」は綺麗な砂浜で遠浅の弓ヶ浜海水浴場に隣接し、臨海水泳活動を行える環境だった。また、車で3分程度のところに共立の総合病院があり、緊急時に頼れる医療機関が近くにあることも選定理由となった。

#### 5 交通手段としてリフト付きユニバーサルデザイン大型観光バスを選定した理由

参加総数は54名となり、その中心となる9名の障がい児は重度の運動障がいや有していて、全員が私物で特別注文の車椅子を使用していた。彼らはその障がいや重症ゆえ呼吸や栄養のための医療的ケアを必要としており、人工呼吸器や加温加湿器、バッテリー、吸引器（唾液や気管内分泌物の吸引）などを搭載できる車椅子を使用していた。そして、その車椅子はフル・リクライニングで長さ160CMを越えるタイプを使用する児をはじめ、同種の形状の車椅子を使用しているものが多く、これらの車椅子はとても大きいものである。また、座面と背もたれが一体化していてリクライニングできるモノコック型の車椅子を使用している方もいる。よって、リフト付きで大型の空間を自由にレイアウトできるユニバーサルデザインの観光バスが移動手段としては有効で、同タイプのバスが2台必要だった。また、移







動中に加湿のための超音波ネブライザーや吸引器、人工呼吸器、加温加湿器などを使用したりするためにバスの本体電源機能とは別の独立したDC電源から変圧した大容量のAC電源の装備(複数の医療機器を使用するので電源容量とその配線状況、各コンセントの位置と容量の確認が重要で、バス2台での乗車配分や乗車位置の選定に影響した)や、車椅子利用の一定姿勢での長時間移動では疲労してしまうので休憩のためのベット空間設備を有しているバスが望ましく、さらに、同乗者の疲労の軽減のために一般的な観光バス仕様のクッション性のある座席を装備しているバスが適当と考えた。これらの必需的な要因から、移動手段としてユニバーサルデザイン仕様でのリフト付き大型観光バス(埼玉に本社があるイーグル観光社のユニバーサル53タイプ)を選定した。また、リフトも利用する方の車椅子が確実に安全に昇降でき利用できる構造や広さであるかの確認が重要だが、この点でもクリアできた。また、今回利用したバスは近隣の東京都や埼玉県の肢体不自由児の養護学校の校外学習や移動教室で一般的に利用されている観光バスでもあった。尚、参加児のうち2名は居住地や本人の精神的な配慮などで自家用のリフター付きワンボックスカーで参加した。

(伴走車両の用意) 荷物運搬兼用の緊急時搬送用として、運搬車装備でリフト付きのワンボックスロングタイプのレンタカー(日産キャラバンロングタイプ)を伴走させた。水泳活動用品を中心に有効な運搬機能の任を果たしたことのみにならず、リフト付きで広い空間なので大型車椅子の設置も可能な緊急時用車両が伴走していたことは緊急時に別行動が可能となるので、参加者一同が安心して観光バスでの集団行動を行えた。

(途中の休憩地) 私達の居住エリアから南伊豆へは観光バスルートで片道走行6時間である。よって、移動時間2時間以内で休憩時間30分を確実に取れるよう旅行経路と休憩場所を検討した。休憩場所は高速道路のパーキングエリア、主要観光道路沿いの「道の駅」だった。大型観光バスが利用でき、障がい者トイレが完備されている場所が最低条件であったが、トイレ内空間は狭く多目的ベットが配備されていない状況もあった。昼食場所は温度調節ができAC電源が借りられ、トイレコーナーを取れるバリアフリーの場所とした。行きは御殿場高原ホテル・ブケ東海のご好意で完全なバリアフリーで素敵な結婚披露宴会場を借用でき、昼食を兼ねた十分な休憩・休息を行えた。帰りは下田海中水族館のレストランで必要空間を専用利用できた。



＜パーキングエリアの障がい者トイレは狭かったが、サービスエリアのものは十分な広さで利用しやすい＞

## 6 緊急時対応 (参考資料3)

経験が豊かで「らっこの会」へ助言してくださる医師、進行責任者と看護師で内容を検討した。

### (1) 緊急時体制

全行程で進行責任者、看護チームリーダーを中心に緊急時体制を整えた。バス移動時では2台の大型バス各々に進行リーダーと看護師が2名ずつ分乗し、緊急対応や連携が取れる体制をとった。

### (2) 事前準備、緊急時対応マニュアル

参加した看護師が中心となって医師の助言を基に、添乗前準備、緊急時対応マニュアルを製作し緊急時に備えた。これはM重症心身障害児施設通園バス緊急時対応マニュアルを参考にした。

添乗前の準備内容は、吸引器の作動及び吸引圧確認・簡易吸引セットの内容確認・AC電源・アンビユーバッグ・携帯電話、看護用物品準備リストなどであった。

緊急時対応項目は、緊急時対応ルート(緊急事態発生時、ホテル時)、バス車中の緊急時対応ルート。具体的な状況と対応の手順および連絡については、吸引器が作動しない・気道閉塞(痰による・嘔吐による)・過緊張による呼吸困難・喘息発作(軽度)・気管カニューレの抜去・嘔吐・痙攣重積・気管孔からの大量出血・呼吸器のトラブル・心肺停止・交通事故・人工呼吸器アラームの原因と対応(作動停止アラーム・気道内圧低下アラーム・最高気道内圧アラーム・電圧低下アラーム)が主な内容だった。

### (3) 緊急連絡先の消防本部と緊急時対応病院の確認・リスト化 (参考資料4 10ページ)

緊急時に備えて行程や休憩場所ポイント、宿、水泳活動場所での緊急連絡先の消防本部と緊急時対応病院を確認・リスト化し、各機関へ確認の電話連絡、および、主要な病院と消防本部には下見時に書類提出を兼ねて訪問し、今回の企画説明と緊急時対応受け入れを要請した。

今回は移動時も含めて全行程で緊急事態は皆無であったが、これらの備えがあったからこそ安心して集団で行動できたと考えられる。

## 7 宿泊施設にて

1階の館の出入り口、および、館内の移動通路は全てバリアフリーであり、通路も広かった。エレベーターは150cm×140cmでより大容量のものが望ましかったが、参加児の中で最も大型の車椅子(160cm×60cm)利用者もリクライニング機構でどうにか利用することができた。

部屋割りは団体利用であったためでもあるが、2階で連続した部屋を使用できたので連携しやすく安心できた。各部屋は和室で上がり框の段差があったが、5cmだったので特に支障はなかったし、和室への車椅子の乗り入れはシート類を引き室内の清潔を保つことを条件に許可された。車椅子は本人が乗車しているのみでなく、数種の医療機器・物品を搭載しているので必需品であり、貴重品である。また、各部屋の利用できるAC電源コンセント数とその容量は十分であり、人工呼吸器、加温加湿器、吸入器、吸引器、モニター機器などを安心して利用できた。また、各部屋の冷蔵庫は自由利用できる容積があり、冷蔵庫や注入物など必要な物品を保管できた。また、保冷パックの冷凍庫利用や氷の用意はフロントが対応してくれた。

入浴に関しては2箇所の家族風呂が広さと機能が満足できる内容であったので、交代で家族利用した。順番取りやスケジュール調整は支援者が行った。が、宿スタッフも配慮してくれた。また、共用の大浴場を支援者と一緒に利用した参加児もいた。支援者などの多くは大浴場を利用したが、浴室付き個室も2部屋確保したので、その浴室を参加児や親が有



効に利用できたこともあった。共用の入浴関連施設は全て1階であった。

1階にある宴会場もユニバーサルデザインで和室または洋室に変換できる床構造となっており、車椅子が利用できるように洋室スタイルのテーブル席で用意していただいた。十分な広さがあり重要なAC電源も余裕で使用できた。

朝食は3階のレストランだった。バリアフリーで広い空間で利用しやすかった。朝食の開始時刻は特別に30分早めていただいたので、「53名の集団が8:30の早朝出発」というスケジュールも予定どおりに行動でき、その後のドルフィンコンタクトも順調に進められ、とても有り難かった。



予備の出入り口  
バリアフリーで  
利用しやすい



エレベーター  
大型の車椅子  
も使用できた



居室入り口  
段差あったが  
対応できた



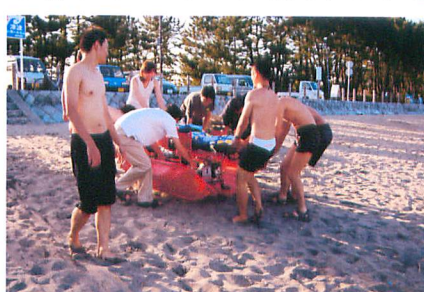
家族風呂は浴槽及び  
更衣室も広く、参加  
児の皆が使用可能



レストランは  
広い空間で使  
用しやすい

#### V 水泳活動1 — 弓ヶ浜・浜辺波うち際活動について — (参考資料4)

今回は遠方への移動ということもあり、旅館到着後の砂浜での海水浴は時間的に難しかった。さらに台風一過で波が高かったので、砂浜での水泳活動は全員行わなかった。しかし、波打ち際にまで移動し浜辺活動を実施した。海岸の防波堤から波内際までは30mほど離れていたが、そこまでの移動は、長さ133cm×幅66cm(内寸112cm×幅52cm)の大型のプラスチックソリを2台用意し、車椅子の左右の前輪キャスターと大車輪をそのソリ上に載せ、ソリを引く「車椅子サウンドソリ」の方



法で、参加児たちの移動を成功させた(左・中央図)。小ぶりの車椅子ではソリは1台で大丈夫だった(右図)。波うち際には、波を間近に見て潮騒を聞いて、また、一部の参加児は足や手で海水や波の感触を楽しんだ。支援者の男性は数名が入水し、大波を利用して「らっこウオーターボーイズ・in弓ヶ浜」を演じ、参加した親子や同席の支援者から声援や拍手が起こった。楽しい思い出残る企画であった。



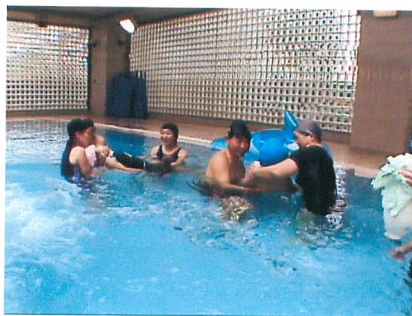


＜きれいな砂浜の波打ち際でお友達と一緒にいっぱい遊んで楽しかったよ。波の音、浜風、海水に触り・・・＞



● 補足：事前のプールの水泳活動にて臨海水泳模擬練習 A「波を楽しむ！」

今回は台風一過で波が高く弓ヶ浜海岸での海水浴は参加児の一人も行えなかったが、事前の定例プール水泳活動において、波に乗る水泳講習を行った。日頃の水泳活動でも「流れるプール」と共に「大波・小波に挑戦」してきたが、今回練習して確認できた基本内容は ① 介助スタッフが参加児と共に波の動き自然に乗れるようにすること ② その波が強かったり、気管切開部への水の接触などの予防として、「介助者が波に背をむけ位置し、参加児の防波堤の役割を担う」と適切に対応できる この2点であり改めて学んだ。また、後述するドルフィンコンタクトの模擬練習を行い、各チームで対応を検討した。



<スリルある大波に挑戦、楽しい>

<気管切開では波が高くなると背を向けて対応すると安全である>

## VI 水泳活動2 — ドルフィンコンタクト — (参考資料4)

### 1 下田海中水族館・館外および館内での支援

円滑にドルフィンコンタクトが実行できるための支援内容として、乗降時の水族館入り口までの大型観光バスの乗り入れ、緊急時・荷物用及び自家用のワンボックスリフトカーのドルフィンビーチ近くの駐車場駐車の許可、ドルフィンビーチの側部ゲートからの入退場許可の配慮、AC電源使用可能で集団で利用できるレストランコーナーの用意、などを協力していただいた。通路がバリアフリーで利用でき、加えて移動時間の短縮、また、安心して昼食・休憩がとれて有効であった。これらの後方支援があつて、私達の集団行動およびビーチプログラムが円滑に進められた。



<観光バスの玄関前までの乗り入れ>

<専用通路の使用>

<AC電源含めレストラン部分専用使用>

### 2 水泳活動 — 下田海中水族館ドルフィンビーチでのドルフィンコンタクトの理解と準備 —

#### (1) 受け入れ先のドルフィンビーチ・スタッフとの連携

ドルフィンビーチのリーダースタッフ（以下、ビーチリーダー）とは計画の当初段階から活動リーダースタッフ（以下、らっこ活動リーダー）が連絡を取り情報を得た。7月の実施にあたり5月と6月に実地調査を行い、現況の施設調査とともにビーチリーダーとは十分な情報交換と企画運営段階での調整



を行った。①参加児の身体的および医療的ケアの情報を提供する ②イルカ達の個性や集団としての飼育状況とドルフィンタッチの運営手順、それらを学習する ③具体的なドルフィンタッチの方法・注意点・緊急時対応を確認しあう 以上の3点がそのポイントだった。

この際、参加児やらっこの会の水泳活動を理解していただくための説明、お渡しした書類などは以下の内容であった。

- a 参加児9名の日常の水泳活動場面の写真で、アンビューバッグでの呼吸補助、酸素療法、専用の入浴担架を使用するなどしっかりとした医療的ケアなどの支援体制を説明できるもの
  - b ドルフィンコンタクトにあたりしっかりとした人員支援体制を準備したこと
  - c ドルフィンビーチ通常営業でのルールから逸脱した依頼内容の提示と受け入れ要請
- 具体的には、以下の3点であった。

① ビーチ参加は9名とらっこの会会員と家族・支援者38名計47名+丘での後方支援6名での合計53名で親とプロによるしっかりとした支援体制を整えた。

② 事前学習(実踏で確認した内容の配布物や撮影したビデオの視聴、プールにて模擬練習)を行った。

③ コンタクト時の以下の5点を要望した。

イ、説明会をカウンター周辺(丘)で行うと共に、事前学習を行うので説明を短時間にして欲しい。

ロ、浜にマット数枚を敷き、休憩コーナーを設置したい。吸引援助など看護師の支援も含めたベースキャンプとする。

ハ、水面上で呼吸補助のためにアンビューバッグ(呼吸補助具)を使用する(4名)

ニ、水面上で酸素ボンベ(直径15CM×高さ40CM)をリュックに入れ背負う(1名)

ホ、入退水時シャワーチェアを使用する 短時間(10秒程度)水中に入れることになる(2名)

これらの情報提供を含めた話し合いの中で、らっこたちのドルフィンビーチへの受け入れが了承された。

● 補足：事前のプールの水泳活動にて臨海水泳模擬練習 B「練習 ドルフィン・タッチ！」

ドルフィンタッチの本番に備えて、実際場面を想定してプール活動で練習した。イルカへの接近の仕



方、タッチの仕方、支援者のチームワークなど、各参加児を中心とした支援者チームで検討しあいながら練習した。当日のビーチ内での諸注意も加えたので、模擬練習として好評だった。

## (2) ドルフィンビーチ・ドルフィンコンタクトの営業状況の理解

5月下旬と6月末の2回、事前の実踏を行い、下記の営業状況を理解した。

下田海中水族館は海の生物とのふれあいパークで、自然の入り江を利用した水族館である。その入り江には6頭のイルカが群れで生活している。彼らは、時間で海上ステージでのイルカショーで躍動的な演技を見せてくれたり(1日3回)、ドルフィンフィーディング(3回)などのスケジュールの中、ドルフィンビーチでシュノーケリングコースや私たちが参加するマリンスーツコースで、お客さんとコンタクト(ドルフィンコンタクト)を行ってくれている。

### <イルカさんの紹介>

2005年5月中旬情報：入り江には現在6頭のイルカが半野生の状態で群生活している。

**ジャンボ** (メス) オキゴンドウイルカ。推定1966生の38才。同種飼育下では世界最年長。

1970年12月15日入館。群れのリーダー。コンタクトは100%安心で、接近し静止し横にもなる。身体を触ってもらう(こすってもらう)のが好き。かわいい目になる。ジャンボがいたからドルフィンビーチが誕生した。暑さは苦手。夏場は日陰が好きで桟橋の影でゆっくりしている事が多い。ジャンボの体長は4メートル20センチある。

他はバンドウイルカで5頭いる。

**ナナ** (メス) 1974年11月13日入館。36才。日本の水族館飼育下で長期飼育第2番目のバンドウイルカ。昨年交尾行動が見られ、イルカの妊娠期間は12ヶ月なのでもうじき生まれるのではないかと予測されている。

**マール** (メス) 1994年4月14日入館。背びれが丸い。

**サーフ** (メス) 1994年12月23日入館。運動神経抜群です。

**ワカ** (オス) 1997年8月9日当水族館生まれ7才。母親モモは1年半前に天国へ。

**サスケ** (オス) 2004年3月年齢？で捕獲されこの1年ジャンボに寄り添うように行動している。穏やかな性格であり、コンタクトもソフトで安心。

ポイントとして、以下の点がこの水族館のドルフィンコンタクトで重要な内容であった。

- ① ジャンボを見習って、人とコンタクトをするようになったイルカたちであるが、基本的にアニマルセラピー用の調教を受けていない。
- ② イルカはじゃれ合ったり軽く噛んだり(アマガミ：甘噛)しながら親密さを保っている。赤ちゃんが産まれると仲間も加わり回遊する。浅瀬は危険なので近づかないし、池須に入れると赤ちゃんは危険である。6月から8月は繁殖期であるため行動は活発になる。

6月下旬情報では、5月中旬と同様でヤングイルカのワカ・サーフたちが相変わらず力を競っている。

「らっこチーム」活動時にはワカの池須誘導を試みてもうが入ってくれるかどうかはわからない。他のサーフたちもワカ同様に人に強く接触したり下肢にアマガミすることもある。ビーチスタッフがイルカと客の間に入り自らの肘や膝を噛ませることで客をかばうこともしているが、それが望ましい対処とは思っていない。現在まで、アニマルセラピー用のトレーニングは行っていない。これらの状況を理解しつつ、参加者でドルフィンコンタクトについて学習し、学びあった。

## (3) 受け入れそのものに関してその手順



① 私たち「らっこチーム」のイルカコンタクトの基本：「ドルフィンタッチ行動ルール」

ドルフィンビーチのビーチリーダーの指示通りに行動することを大原則とした。そして、そのビーチリーダーとらっこ活動リーダーが連携し状況判断をして、らっこ活動リーダーの誘導で各参加チームが行動するという「ドルフィンタッチ行動ルール」で進行した。

100%安全なジャンボとのコンタクトを主眼に置いて行う。ジャンボなら呼吸も上手なので20分程度静止状態でいられる。しかし、リーダーであり警戒心も強く、気に入らないと他のイルカを引き連れて去ってしまうこともある。慣れていない内容については神経質である。ビーチリーダーがジャンボを誘導するのでそれに応じてビーチリーダーの指示に従って交流する。

② 服装 私達のチームのビーチ参加者は44名と人数が多いので、ビーチスタッフは私達をイルカの甘噛みなどからカバーできない。また、らっこたちのサポートのために親・支援者は不自由な動きにならざるを得ない。それらから、らっこたち、そして、親・サポーターも全員下半身は素肌を出さないようにする。例えば、ジャージやロングパンツなどははく。マリンブーツは用意している。持ち込みのマリンブーツや運動靴でもいい。石や海藻付きの石もあり滑りやすいので、その点を考慮したブーツを履く。また、参加児たちは靴下でもいいから保護をする目的で何かしら履く。尚、カラーは気にしないでよく、カラフルな水着でもOKである。しかし、ライフジャケットなどはボリュウムがあるので遊具と誤認する可能性があるので使用を控える。

③ コンタクト中の注意点

イ ビーチリーダー・ビーチスタッフの誘導（指導・指示）に従う。

ロ 入り江中央の水族・展望ドーム(以下、ペリー号)に背を絶対向けない。自然と後退し深水に入ってしまったては危険である。

ハ ペリー号に向かって「左」「右」「前」「後」の言葉合図が原則。イルカたちがどこにいるか、ビーチリーダー達が声をかけて教えてくれるのでイルカたちを意識しつつ参加する。

ニ イルカの前面から、頭部や上半身に決して手を出さない。

ホ イルカが近づいてきたら 1～2歩下がり道をあけ直進させ、イルカさんの側方から触れるようにする。

ヘ 身体の真ん中の背びれの下周辺から後方を触る。胸ビレなどはバランスを調整している部位なので触らない。イルカが静止し、コンタクトに気を許してくれたら上半身、背中や胸、頭部などに触るようにする。しっかり身体をさすってあげて身体を磨いてあげるように心掛ける。優しい声かけが一番である。

一般客のドルフィンタッチの様子（前記③イーへに注意）



ト 他のイルカたちも近づいてくる。その時、スピーディーで接近に気づかないこともあり、私たちの足下を擦りぬけて行くことも多い。この時は下肢やお尻などを強く押されるようになるので要注意で



ある。びっくりして身体で大きく反応し、驚きの奇声をあげるお客さんもいる。

チ 吸引器はビーチに設置しておく。ビーチに戻り吸引する。

リ ジャンボの水深について（水面上10-20cmであろう）

一般的な正中姿勢では背中が、また、慣れてくると横むきになるので脇腹が水面上に出ることになるが、その高さは10-20cmであろう。その部位に手で触れてタッチすることになる。

ヌ 絶対に気管切開口から海水を浸入させない！うっかりは許されない！海水は砂を含んでいるため気管内にはいると気管内・肺損傷が考えられる。事前の気管切開部の防護及びチームとしてのサポート体制の確立 これらの事前検討・具体的な準備を含め100%の万全体制で臨む。

#### （4）实际的な入水プログラム・調整

・私たちは10:00のドルフィンコンタクトに参加するが、9:00のドルフィンコンタクトの約40名のお客さんと9:40-10:10頃に交叉するので要注意。

・入水準備を行う。シャワーコーナー・着替えコーナー設営（支援者は準備を進める）

イ 10:00 説明会をカウンター周辺（丘）で行う 事前学習を行っているので短時間となる。休憩マットや吸引器をビーチへ設置する などの準備も適時行っていく。

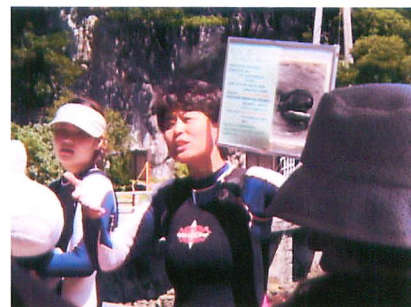
ロ 10:10前後 左階段からビーチに降りる。階段下は直進すると危険なので右側（ビーチ側）へ向かいおりていく。入水せずビーチでスタンバイ状態にて、ビーチリーダーの指示を待つ。

ハ 10:10-10:40 ビーチでのドルフィンタッチ活動約30分。ビーチリーダーは入水しジャンボを呼ぶ。毎回そうだが、イルカがきてくれるか、また、きてくれるまでの時間はわからない。赤ちゃんが産まれていればリーダーのジャンボ中心に赤ちゃんの保護を含めて回遊する事がイルカたちの習性で、その時のコンタクトは厳しい。また、慣れてない内容には警戒する。吸引器の音などはどうか？

ニ ジャンボがきてくれてビーチリーダーがジャンボのテール（尾ビレ）をつかんでジャンボが静止したら準備完了。ビーチリーダーが入水の合図を送ってくれる。らっこ活動リーダーのリードで入水していく。

ヘ 10:45-11:20 丘へもどり 着替え・更衣、水分補給・休憩。

・スタッフの片付けを含め全てのプログラムを11:40までに終了する



＜当日のドルフィンカウンター。ビーチリーダーから説明を受けているらっこの会の親子メンバー＞

#### （5）医療支援体制について

今回、当初予定の医師の参加は都合で中止となったが、重症心身障がい児の看護経験のある看護師が4名参加した。参加児は9名だったので、看護師1名が参加児2-3名の担当となった。保護者がトイレなど何かしらの都合で子どもから離れざるを得ない時の付き添いと医療的ケアの補助、水泳活動中の



後方支援の役割を担った看護師だったが、参加した親子にとって医療的ケアを要する運動障がい児の水泳支援に経験のある看護師が同行し一緒にいてくれることは、安心できる貴重な存在だった。

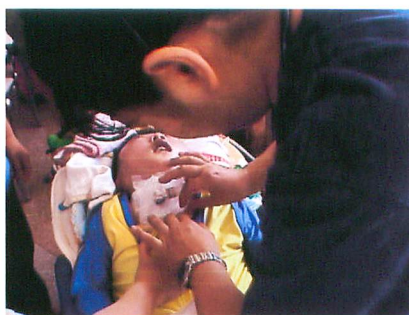
#### (6) 入水・コンタクト支援体制について

参加児の運動障がいの状態、体格（身長・体重）、医療的ケア（アンビューバッグでの呼吸補助、酸素療法の水中導入）や移動方法（入浴担架の導入の有無）などで判断し、保護者も入れて2名から5名が入水支援を行った。その支援スタッフは肢体不自由児教育に経験がある養護学校教員と医療セラピスト（小児専門の理学療法士や作業療法士）や介護ヘルパー業務にあたっている個人であり、皆さんが仕事を通して重度障がい児と接している専門スタッフだった。また、彼らの水泳支援を行ってきたらっこ支援者の会の会員メンバーでもあり、支援としては安心できる理想的なチーム構成であった。

#### (7) 医療的ケアへの対応や補助

##### ① 気管切開への対応

今回は、気管切開施行児は7名が参加した。気管切開部の対応は重要である。最も重要なのは、気管切開部を入水させない確実な支援技術（ハンドリング）であり、この点は、保護者及び支援者は教習を受け実践してきた。また同時に、適切な処置も必需である。気管カニューレを安定させ気管切開孔を保護しているガーゼ周辺を防水テープで保護することは水泳活動中の原則である。今回は海水浴活動であるので、もし、気管内に海水が流入したら一大事である。真水と違い海水は微細な砂が混じっているので気管内や肺内の損傷も考えられ、早速の気管内洗浄も十分な対応と考えにくい。実際、数年来の私達の水泳活動で延べ約300名が水泳参加してきたが1回の事故も起こしていない。しかし、今回は念のために「重症心身障がい児で気管切開施行児・者の入浴時の防具（ラパック対応）」（文献2）を海水活動で導入した。参加した看護師は、この支援システムの開発者であったため、保護者は講習を受け、実際は担当看護師が設定した。この対応が加わったので、安心して水泳活動が行えた。



尚、このラパック対応については、私達の通常の水泳活動では入浴と違い活動性が大きいのでアンビュー対応ではカニューレとアンビューバッグの接続管との微妙な瞬時的な調整が行いにくいこと、即時的な吸引時にワンアクションが必要（接続管をはずすことに手間が要す）なので対応しにくいという2点が使用した保護者から指摘があり、今後の課題となった。

##### ② 酸素療法の水上導入

今回参加した1名は人工呼吸器離脱中酸素療法が必要だった。日ごろの水泳活動と同様で、支援者が一般的な酸素ボンベ（300mlボンベ、構造上の理由から液体酸素は水上導入できない）をリュックに入れて背負い参加児に同行するという方法で、酸素療法を継続しつつ参加した。

##### ③ 人工呼吸器離脱時アンビューバッグでの呼吸補助

参加した4名は、24時間人工呼吸器利用であるために、水泳活動中はアンビューバッグによる呼吸



補助を受けつつ水泳活動をした。保護者、もしくは医師による研修を終了した支援スタッフが担当し、安定した状態で活動できた。尚、ここでは適切なアンビュー操作がチームとして行えることが前提で、これが不完全だと気管切開孔や気管内損傷が生じる可能性があるので、具体的な方法を研修場面で確認し、習熟しておくことは必要かつ絶対条件である。

#### ④ 口鼻腔吸引・気管内吸引

ビーチサイドで見守りを行ったドライ状態の看護師チームが吸引を担当した。参加児と同一行動をしている保護者の判断で、吸引のタイミングを見計らってビーチサイドに引き返し、そこで看護師に吸引をしてもらって状態が安定したら、水泳活動を続行した。

#### (8) 体温調整のための専用水着、活動後の温浴、更衣コーナーや日陰コーナーについて

かつて当会が他機関の研究助成で水泳研究に臨みアクアメーカー（株）フットマークと開発した医療的ケアを要する運動障がい児対応の専用水着（参考文献1）を着用して参加した参加児は3名だった。これは、遠赤外線保温用素材（サーモトロン）を使用し、体温調整低機能へ配慮した内容も加味されたものである。また、同メーカーで同様の素材を使用して今回にあわせてオーダー製作した専用の保温用インナーを利用した参加児は2名だった。また、一般のドライスーツを1名が着用した。実際の当日のドルフィンビーチの海水温は、台風直後の影響もあって26°Cと低かったが、快晴でよく直射日光が当たっていたこともあり、入水時間は30分程度であったがこれらの準備が奏効し問題がなく終えている。

<専用水着>

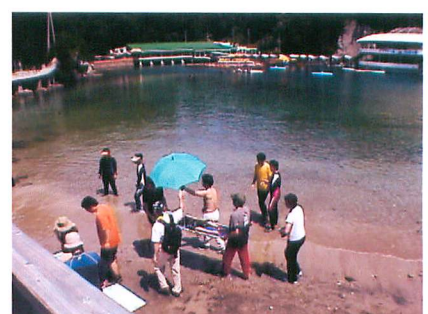


<インナー>



また、活動後の温浴は屋外に仮設の温浴空間としてビニールプールに温水を入れて対応し、十分な体温回復を行った。また、仮設の更衣コーナーも作ったがタープなどで日陰コーナーも用意したので、日向や日陰で各児に合わせた体温調整が行えた。活動後も体調をくずすことはなかったが、これらの準備と配慮があったからであろう。尚、これらの仮設の温浴なり更衣コーナーの用意は、ドルフィンタッチを行っている間に施設環境作りの当会のスタッフが連携して準備にあたった。

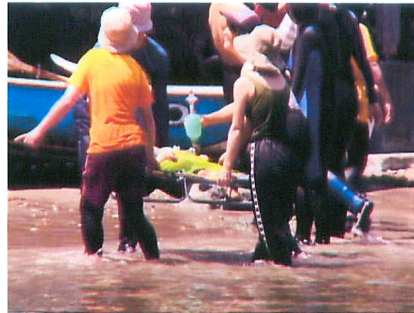
#### (9) 移動方法について



ドルフィンビーチには15段ほどの階段を昇降する必要があった。支援者が2名で参加児を抱えて移動した。また、骨折しやすい参加児は本人専用の入浴担架を使用し2-4名が入浴担架を支えた。これ



ら移動時には医療的ケアの継続は当然ではあるが、支援者でアンビューバッグ施行者や酸素ボンベ携帯者は常に参加児と同一行動をとっていた。



＜参加児専用の入浴担架は、水泳活動で使用してきたが今回も大活躍。安全な移動を実現する＞

### 3 ドルフィンタッチの実際 ― 進行の状況・実績（添付DVD参照）―

当日は快晴で気温は高く暑かった。海水温は台風一過の影響で例年平均28℃より低めの26℃だった。傘などで日陰を作ったり、保温用の水着着用などの対応が有効だった。

前記した「ドルフィンタッチ行動ルール」に従って行動した。実際の入水可能時間は30分程度であった。ドルフィンビーチでは、インストラクターのビーチリーダーはじめ7人体制でリードしてくれた。ドルフィンビーチのビーチリーダーの指示通りに行動することを大原則とした事前の行動計画に従って進めた。そのビーチリーダーとらっこ活動リーダーが連携し状況判断をして、らっこ活動リーダーの誘導で各参加チームが行動した。

安全なジャンボとのコンタクトを主眼に置いて行った。ビーチリーダーがジャンボを誘導し体制が整ったところで、そのビーチリーダーの指示に従ってらっこ活動リーダーが各参加チームを誘導した。水深1メートル程度で体長4メートル20センチのジャンボが静止している。その周囲に各チームが足元に注意しながら接近していく。2－3名が介護に当たり、また、必要に応じて酸素療法やアンビューバッグによる呼吸補助を受けながら参加児が主に仰向きや座位抱きで接近した。介助者の介助で手をジャンボに手を伸ばすようにし、しっかり身体をさすってあげながらタッチした。一人2分3分はじっくり接し、交代で交流した。途中、ジャンボ以外のイルカの接近があり、危険回避のために約7分程度休息があった。その間はビーチの浅瀬で、または、ビーチサイドの仮設休憩マット上で待機した。必要に応じてビーチサイドで親または看護師による口鼻腔吸引や気管内吸引を行った。再度ジャンボのとの交流体制が整ったのでドルフィンタッチに臨み、ジャンボとさらに交流できた。



＜ビーチリーダーとイルカ＞



＜左手前のジャンボと主に交流した＞

以下、参加児9名のドルフィンコンタクトの状況を写真で紹介する。

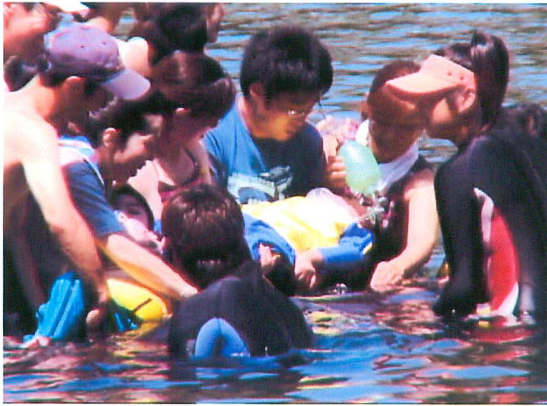




遠景



H君



R君



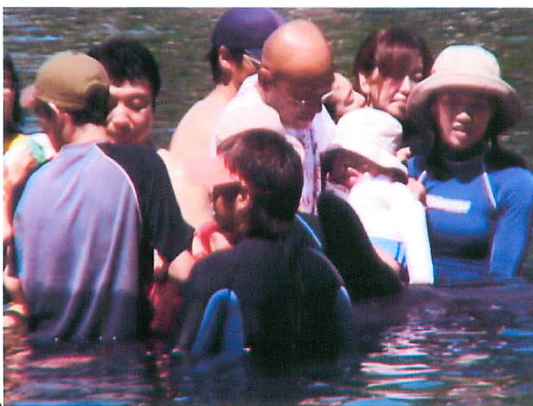
A君



S君



R君



Sさん



Aさん





＜状況でビーチサイドのマット上や浅瀬にて待機し休息した。必要なら吸引を行った。＞

#### (10) 活動後のシャワー・体温調整と着替えについて

ビーチ施設はビーチサイドにある一般的な健常者用のシャワー・更衣室であって、狭く、参加児には使用できないものであった。よって、屋外に仮設施設を用意した。温水シャワーコーナー・温浴コーナー（更衣室の中の蛇口から屋外に引いた温水用のロールホースとシャワー口、温水をはったビニールプール）と日陰・着替えコーナー（日陰用のタープ、折りたたみ式簡易ベット、目隠し用のシート類）を設営した。一部は屋外倉庫の空間を利用し、更衣を行った。







温浴・着替え・休憩など

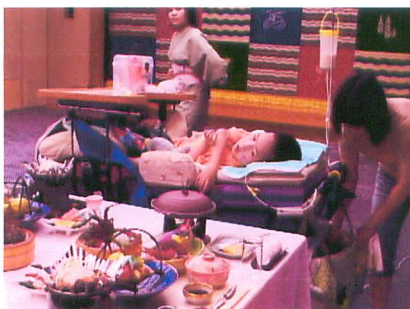


ドルフィンタッチ後全員で

## VII 他の活動について

### 1 懇親会

1 日目の夕食は交流会となった。参加児を中心にゆっくりと食事をしつつ、日頃の情報交換や各チームで翌日のドルフィンタッチの進め方の再確認をしたりなど、参加家族同士や支援者と交流できる時間が持てた。その後、次の日の準備を考えると短時間としたが、音楽が得意な保護者のリードで今回の合宿のテーマソング「バケツ100ばいのなつやすみ」をポップ調で合唱したあと、保護者から参加児たちへの‘参加記念イルカさん人形’をゲーム仕立てでプレゼントし、参加児の紹介と楽しみを兼ねたホットな時間が持てた。これらは、らっこの会のお母様方の独自の企画だった。



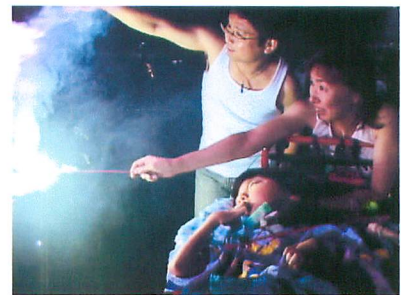




＜楽しかった夕食・懇親会。ゆっくりと交流でき、みんなで‘優しい時間’が持てました＞

## 2 花火、潮騒を聞きながらの星空観察

懇親会后、参加児や親の体力などで余裕のある家族が自主参加の屋外での「花火」、浜辺での「潮騒を聞きながらの星空観察」を行った。夏、そして、浜辺ならではの思い出に残る企画だった。



## VI 傷害保険など

参加者全員が団体旅行傷害保険に加入した。支援者全員は社会福祉協議会のボランティア保険に加入した。尚、参加した看護師は全員が各自個人的に看護師賠償責任保険に加入していた。

## VII 今回の臨海宿泊水泳合宿体験と今後の課題

### 1. 有効だったこと

数年来、地域の室内プールを使用させてもらい水泳活動を実践してきたがその実績が基盤となり、これまで皆無であった臨海活動が実現できた。今回の臨海宿泊活動で、バス・宿舎・活動場所でのバリアフリー環境の確保、必要なAC電源の確保など医療機器の稼動条件の整備、体調が管理できる条件を前提とした行程やプログラムの検討、健康管理や医療的ケアに関して保護者と医療スタッフの連携、水泳活動や親睦的な活動で保護者と支援スタッフの連携、水泳活動での環境整備に関する支援スタッフの企画力・実行力、緊急時対応で医療機関や消防機関との体制作り、などの具体的な準備や配慮に対する実績が得られた。台風一過のため1日目の砂浜での水泳活動はできなかったが水際での砂浜活動は楽しく行えた。そして、私達の心からの要望、夢であった「ドルフィンコンタクト」が2日目に実現できた。臨海活動での環境整備や支援技術について、実践検討が行え、同時にイルカセラピーの観点から検討が行えた。

また、「家族だけでは宿泊旅行が困難だった」という理由で、宿泊旅行経験が持てなかった会員も参加できた。この宿泊合宿で会員同士はもちろんのこと、支援グループとの交流と親睦ができたことも貴重な成果になった。私達の活動の拡がり、今後の活動がさらに発展していく基礎ができたと考える。

## 2. 改善を要したい内容

事前の緊急時の医療対応などの準備を行ったことは良かった、また、参加家族や支援スタッフから医療的ケアも含む参加児たちの看護に経験のある看護師が同行参加したことで安心できた、特に、宿泊施設の居室や入浴時の支援で大きな活躍があったなど好評であった。しかし、看護スタッフから合宿終了後に今回の反省点として意見がだされた。参加児に関する事前情報がより整理した形で適切な時期に提示して欲しかった。その内容は ① 参加児の医療的な基本情報と医療的ケアの内容 ② 保護者が行えないときの医療的ケアを看護師が補助するという役割があったがその具体的な内容、この2点についてであった。参加児の医療的ケアの内容は事前の一覧表や当日にはケースファイルとして用意してあったが、看護スタッフ側の意見が示すように、今後はこのような企画時には紙面での情報提供と共に、参加児・家族と医療スタッフとの事前の面接をかねた情報交換・学習会を開催していきたい。

## VIII まとめ

今回、福祉医療機構から助成金を頂き、私たちの念願の臨海宿泊が実現できた。通常の水泳活動で心がけている「100%安全で、楽しく」を合言葉とし、バリアを極力フリーにし、医療的ケアと水泳活動の支援環境を整えつつ、準備・実行し、参加者全員が貴重な体験だったと語る大成功の結果が得られた。今後、医療的ケアを必要とする運動障がい児の臨海活動の参考となった。彼らの活動と夢の実現には、保護者と多職種の支援スタッフ、そして、交通・宿舍・臨海活動の利用機関との双方が理解しあいながらの連携が必要だった。反省点も含め今後の活動指針や具体的な活動内容が実績として、また、今後この類似的な活動での参考資料となると考えられる報告書として提示できた。

## IX 今後について

年間を通じて実施してきた水泳活動を確実に実践しつつ、今後も今回のような宿泊も含めた水泳活動の企画に挑戦していきたい。また、同様の活動を行っている方々、それを望んでいる方々と交流していきたい。

## X 参考文献・資料、その他

### < 文献 >

- 1) 『医療的ケアを必要とする重度運動障害児・者の水泳活動』、平成13年1月社会福祉法人讀賣光と愛の事業団「第30回重症心身障害児（者）療育に関する研究助成金」助成報告書 p29-42、2002。（「らっこ支援者の会」で配給しているので問い合わせ下さい）
- 2) 『気管カニューレを装着している重症児(者)の安全・安楽な入浴をめざして』—気管切開孔用入浴用

防具を用いた入浴介助の工夫―、第16回重症心身障害療育学会抄録集 A5-4 p104、2005.

<資料>

1. 参加者全員に配布した企画の概要説明
2. 参加希望児の保護者への医療的ケア関連も含む事項のアンケート調査内容
3. 医療体制事前準備・緊急時対応マニュアル
4. 臨海水泳宿泊合宿総合パンフレット
5. 臨海水泳宿泊合宿終了後アンケート

<その他>

文中の写真に関しては、本人または保護者に修正なしでの掲載の許可を得ている。

(謝辞)

今回、独立行政法人福祉医療機構「障害者スポーツ支援基金」助成事業を頂き、貴機構並びに東京都社会福祉協議会の関係諸氏の皆様、誠にありがとうございました。ささやかな私達の活動では‘あこがれであった「子どもたちの夢」の企画’が、今回の助成があり実現できました。心より深く感謝しております。また、この企画を理解し助言してくださった医師F先生、武蔵村山市社会福祉協議会自立活動支援センター並びにボランティアセンター、JTB立川支店、イーグルバス株式会社、御殿場高原ホテルブケ東海、南伊豆弓ヶ浜温泉「季一遊」、下田海中水族館・ドルフィンビーチカウンター、フットマーク株式会社、あそびサークル「多夢多夢」をはじめ多くの皆様に心から感謝しております。ありがとうございました。そして、今回の臨海水泳宿泊合宿に参加してくださいました30名の支援スタッフの皆様、通年に亘り支援活動をしてくださっている支援グループ事務局の皆様にも感謝の言葉を申し上げます。

◇この事業は、独立行政法人福祉医療機構（平成17年度地方分・障害者スポーツ支援基金）の助成金の交付により行ったものです。

◇この報告書の製作及び照会先 2021（令和）3年8月30日訂正

医療的ケアの必要な重度運動障がい児者の親子水泳活動グループ「らっこの会」とその活動や普及を支援する「らっこ支援者の会」の下記が共同ホームページです。その中の「お問い合わせコーナー」をご利用下さい。  
ホームページURL: <https://racconopool.wixsite.com/racco>

◇下田海中水族館ドルフィンビーチカウンターに関して

我々の2005年企画はドルフィンビーチの通常営業規定内のルールにて利用させて頂きました。また、現況では飼育下のイルカたちも世代交代がありその状況変化ある中でのドルフィンビーチ営業やドルフィンタッチであるとお聞きしています。利用検討に際しては、ホームページや直接問合せ、訪問などして情報収集下さい。